新潟の水辺だより

Vol.33

●編集発行・新潟の水辺を考える会　●発行日・1995年8月15日 Vol.33

●事務局　〒950 新潟市大学南1丁目7821-5 ㈱グリーンシグマ内 Phone025-263-2733 Fax025-263-1134
●編集　〒950 新潟市河渡2-2-8 ㈱サザンウインド内 Phone025-271-7515 Fax025-271-1884

TOPICS

7・11関川水害に思う

大熊　孝（新潟大学工学部）

今回のトピックスは、この3月末に河川審議会から出された「今後の河川環境のあり方について」という答申について書くつもりであったが、上越地方が7・11水害に襲われたので、その感想を簡単に綴ってみたい。ただ、現段階ではまだ姫川を見ていないので、ここでの感想は関川に限定される。

災害が起こった直後、マスコミから私にいろいろ取材の打診があったが、大学内の公務が忙しく、それに応じられたのは7月15日(土)のテレビ新潟の取材であり、ヘリコプターで関川を上空から見せてもらった。次いで、7月17日(月)、職員・学生と一緒に車で関川の災害現場を視察してきた。

美守の災害現場
（すでに強力な土工機械力によって復旧が始まっていた。）

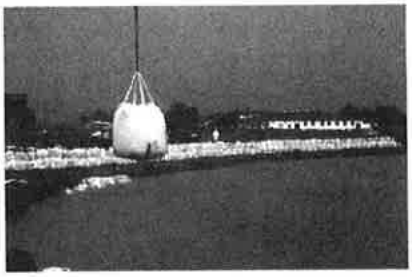
まず上空からの第1印象は、関川の水はまだかなり濁っていたが、新井より下流で合流する支川群は濁っていなかったことである。これは、関川上流域に豪雨が限定されていたことを意味する。関川上流では、笹ケ峰ダムの上流から山崩れが多発し、河道が蛇行する度にカーブの山腹斜面が崩壊し、河原には直径1～2mの巨石や根付きの流木が散乱し、至る所でコンクリート護岸が破壊していた。おそらく関川上流では破壊力の強い土石流のような洪水が、急勾配の河道を一気に流れ下ったものと思われる。この洪水規模はおそらく100年から200年に一度の大洪水で、1967年の羽越災害に匹敵するものであったといえる。ただ、豪雨域が姫川・関川上流域に帯状に限定されていたのである。

新井市から下流では、河床勾配がかなり緩くなるとともに川幅も広くなり、支川群の出水がないために、洪水の破壊力は急激に減少し、護岸や堤防の破壊が発生しなかったものと考えられる。

マスコミでは盛んに、県管理区間であった上流のみに被害が集中し、国管理区間の下流に被害がなかったことを取り上げ、県の技術に問題があったのではないかという論調を展開していた。だが、今回の関川上流のような大規模洪水をハードな施設で防ぎきることは、ほとんど不可能といってよいであろう。

マスコミの論調でもう一点気になったことがある。それは、被害が発生したことに対して、川を敵視し、川を悪者扱いにしている点である。確かに今回の被害は大きいかも知れないが、普段川から受けている恩恵と比較してみるならば、100年とか200年に1度の被害でしかなく、私はこの程度の被害は甘受すべきものでないかと考えている。もし、どうしても100年に1度の被害も受けたくないというならば、川から離れて住むべきなのである。

川は、何万年もかけて己の営みを続けており、時として大洪水が発生するのは自然の摂理であり、自由奔放に流れたに過ぎない。そういう川の領域に人間が勝手に進入しているわけであり、どんな被害が発生しようとも川のあずかり知らぬことなのである。



月岡の災害現場
（1トン土のうによる復旧。こんな大きな土のうは新製品？）

ところが、このような被害が発生すると川を悪者扱いにして、100年、200年に1度の被害まで完全に防ごうということになり、川をコンクリートでガチガチに固めてしまう結果になる。そうなると川は無味乾燥のつまらないものとなってしまい、普段の川とふれあう楽しい生活は失われてしまうのである。なおかつ、施工されたコンクリート護岸も、再び100年から200年に1度といった洪水がくると、もちこたえることができず結局は破壊されてしまうのである。

人間の都合ばかりだけでなく、川に対する感謝の気持を忘れずに少しは川の身になって、どの程度まで復旧すればよいかを考えるべきでないかと思う。

REPORT 海外・県外レポート

水郷水都全国会議（横浜）で通船川の取り組みを発表

都市河川は都市に住む人々の安全と快適さ、自然と都市をつなぐ系の存在を問われつづける。
より本質的に迫るため、川づくりにまちづくりのワークショップ手法ロールプレイゲームを試みた（写真）。

第11回水郷水都全国会議は“都市河川新時代”というテーマで7月28日～30日の3日間、横浜市で開かれました。

当会の兄貴分の会であるよこはま川を考える会のメンバーが中心となって運営されていましたが、子供たちが100人参加するなど独自なプログラムが組まれていました。とくに私の参加した第3分科会“川づくりへの市民参加”では、行政、市民、企業などの役割を普段と替えて議論するロールプレイゲームが会場の喝采を受けていました。

大会の横浜宣言では、新たに「都市河川法」など新しい都市河川制度の検討を盛り込むべきかが議論された。未だ不十分な議論でないか、否、これから新しい時代へ向かって新しい概念で河川を考えるべきで、その意志を強く打ち出す意味で重要だ。など意見のやりとりがありました。

当会にとっても、通船川という新しい概念=考え方で再生させてゆかなければならない川をテーマに議論を始めている折でもあり、非常に興味深いものがあります。今後、新潟でも大いに議論してゆきたいと思います。

世話人　相楽 治

●横浜の川の源流を訪ねて（谷戸）

1995年7月30日（日）エクスカーションに参加した。「恩田の谷戸ファンクラブ」や「まいおか水と緑の会」、「市沢・仏向の谷戸に親しむ会」の皆さんから猛暑の中ご説明をいただいたうえに冷たい飲み物を現地で手配していただいた。ありがたいもてなしであった。私が参加した目的は、新潟市という田舎の中では都会にすむ者が、横浜という都会の田舎を見ることにより、比較対照して得られるものがあるのではと考えたからである。谷戸（やと）というのは、横浜などにわずかに残された丘陵地帯にある林と湧水と田で構成される地形のことである。関東地方ではヤツ、ヤ、ヤチなどいろいろな名称で呼ばれている。地形としての谷戸だけでなく、地名としての谷戸、さらに社会単位としての谷戸の役割を説明いただいた。

330万都市横浜は住宅開発などを中心に谷戸を切り刻むことで発展してきた。谷戸にちなむ地名は次々に行われる町名変更によって、緑にちなむ名前なってしまっている。自然を失うにつれてその大切さを敏感に感じる人たちのネットワークがめぐらされてきた。土地所有者の高齢化や地代の高騰によって維持管理やその存続さえも危ぶまれている。振り返って雪国新潟を考えると中山間地の高齢化と過疎が急速に進んでいる。狭い日本国内で住み分けることの難しさを改めて感じ、今こそ田舎と町の協力連携を考える好機と思った。

高橋 正良

市沢の谷戸は600頭のゲンジボタルが出現する横浜のオアシス
資料写真　市沢・仏向の谷戸に親しむ会

海外・県外レポート-2 REPORT 2

ホル川流域の森と川・・・
シベリア・ネイチャリングツアー報告 その1

シベリアの大自然

両岸に広がる鬱蒼とした広葉樹の密林は、私たちの予想とは大きくかけ離れたものだった。同じシベリアとは言っても、一昨年訪れた北緯58度のマヤ川水系の針葉樹林帯とは違って、本州中部の山地にも似た、なにかなじみ深い優しさを感じさせる。

冷たく澄み切った流れは、あくまでも豊かである。川岸まで迫る湖畔林・そびえ立つ岩場・積み重なる流木の山....岸辺の光景は次々に移り変わる。幾重にも続く緑の山々の間を縫うように突っ走るボートの上で、原生自然が織りなす壮大な景観に声もなく圧倒されるばかりであった。

今年の6月に私たちが訪れたロシア共和国のホル川は、シホテアリン山脈に源を発するアムール川水系の河川で信濃川を上回る規模がある。距離にして新潟より約100kmほど北、訪問地は北緯約47度～48度付近に位置している。シベリアの大規模な森林破壊のニュースは我が国にも伝わっているが、この流域には手つかずの見事な原生林がまだ残されているのである。

川が育んだ魚類相

豊かな森には、予想に違わぬすばらしい清流が流れていた。6月上旬の時点で水温は8～9℃、ホル川支流のチュケン川の水は生のままでも飲めるような清らかさである。

ホル川流域には、レノックやハリウス・タイメンなどのサケ科魚類を始め、カジカの仲間や渓流性のフクドジョウ、3種類以上のアブラハヤ属・コイ・フナ・ヒガイ類などのコイ科魚類が生息すると言われているが、ホル川流域には数十種は生息しているものと思われる。

支流のチュケン川は、中流域上部の河川景観を呈しており、生息魚種はほとんど冷水性のもに限られる。中でもレノックは生息数が多く、現地の重要な食料源ともなっている。60cmあまりに成長する一見ブラウントラウトに似た斑紋のサケ科魚類で、コクチマスという和名がつけられている。

日本の魚を見慣れた者にとって、これがサケ科の魚かとびっくりさせられるのはハリウスである。まず、帆のように張った異様に長い背鰭に驚かされる。そして、未成魚は灰緑色の背面と銀白色の腹部のありふれた体色だが、30cmほどの成魚は紫やピンクに染め分けられる。それでいて、この魚はシベリアで最も美味な魚の一つである。

9月下旬から、この川にはサケが大挙して産卵のために溯上してくる。私たち日本人に最も馴染みの深い魚の一つであるが、北米ではドッグサーモンという屈辱的な名前がつけられている。海から遠く離れているせいもあるが、ホル川でも味に関してはサケ科の最低ランクに評価され、なぜか悔しい思いがしてならない。

9月中旬、私たちは紅葉に染まるホル川流域を再び訪ねる。原生の森と川は、また目の覚めるような感動を与えてくれるに違いない。

井上 信夫

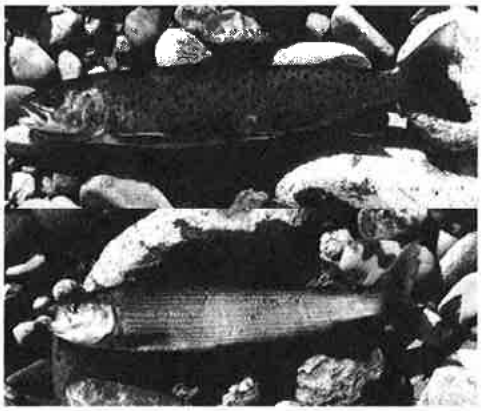


写真　上：レノック　下：ハリウス

REPORT2 県内水辺レポート

海岸・港の未来について

1.港と市民意識

新潟に来ることを「来港」と呼び、また、新潟の市章が錨であるなど新潟の町の歴史は港と深く関わっています。しかしながら、開港五港のうち他の横浜、神戸、長崎、函館の四港に比べて市民の港に対する意識が低いのではないのかと感ずるのは私だけではないのではないのか思います。この原因は、歴史や地理など様々な要因があると思います。

2.今、何故「みなと」か

私としては、次の二つの観点から新潟の「みなと」を見直してもらいたいと思っています。

第一点は、国際的なボーダレス化の中での新潟の活力の確保の観点です。今、新潟の経済社会は様々な面で海外との連携を深めています。そうした中で、海外との輸送で主力となっているコンテナについては、県内分の8割以上が地元の新潟港ではなく横浜などの県外の港を利用しています。このため、例えば韓国へは新潟港を利用すれば1個6万円程度ですむものが26万円程度もかかることとなり地元経済に大きな負担となっています。今後増々海外と地域経済社会の関係が深まる中では、このような構造的な課題に対しては早急に対応が必要だと思っています。

第二点は、真に豊かな地域づくりを進めるための一つの有効な方策は水を活用するという点です。この点は正に会の活動そのものだと思います。私の印象としては、冒頭の記述とも関連するのですが現代の私達は、昔の人々に比べて水との付き合い方が下手になったと思います。港という字がさんずいに巷（ちまた）と書くように港は人々が水と様々な付き合いをする賑いの場だったのです。今、港という水際空間を活用して現代にあった新しい人と水の付き合い方を模索することが必要だと思っています。

3.新潟港で進めているプロジェクト

21世紀に向けて新たな地域と「みなと」の関係を築くための様々なプロジェクトを進めていますが、そのうちのいくつかについて紹介をします。

(1) 新潟東港の整備

新潟東港は、昭和44年工業港として開港しました。現在は、その後の経済状況の変化を踏まえ、国際流通港湾として大型のコンテナ船が利用できるコンテナターミナルの整備など進めています。

明治初期新潟税関図　新潟市郷土資料館蔵

(2) 新潟みなとトンネルの整備

新潟は、信濃川により町を分断されています。特に万代橋より下には連絡路がなく港湾活動や市民生活に不便をきたしています。このため港口部にトンネルの建設を進めています。

(3) 万代島の再開発

新潟は、環日本海地域の中核都市を標榜していますが、その国際交流機能は不十分な状況です。このため万代島を再開発し、国際交流拠点づくりを進めています。

(4) 入船・西海岸地区の整備

入船・西海岸では、人と港や海が付き合える空間として、海浜やマリーナ更にはクルージングの為のターミナルなどの整備を進めています。

4.賑う新潟港を目指して

私たちの生活は、国際化の中で増々海外に依存しています。それを支えているのが港です。しかし、その港を生かすのも殺すのもそこでの人々の活動なのです。私としては、今、皆さん方に、「みなと」について是非考えていただきたいと思っています。自分たちの港として。

第一港湾建設局 吉永 清人

通船川再生の活動に関わることになった経緯について

今から丁度5年前、私が東山の下小学校の嫌われ者のPTA会長として活躍（？）していた頃、この小学校の創立40年目の記念事業に関わる機会がありました。

記念事業の一環のお定まりの記念誌編纂の作業の一部として、校区の変遷を若干の聞き取りと新聞などの記録を基にした資料をまとめておこうという作業が行われ、沢山の人のご苦労によって、幾らか自画自賛（この「自」は勿論複数の「自」である。）乍ら結構面白いものができあがりました。そしてもう一つ、私の発案でこの辺りの40年前と現在の様子の違いを鳥になった気分で見て取ることの出来る立体地図を子供たちと作ってみようということになり、担当の先生にはご迷惑をおかけしたに違いないが、夏休みを利用して一応の形を作りあがることが出来ました。（この間の事は、新潟日報にわずかですが報道されましたのでご記憶のある方もあるかもしれません。）

作業の過程で、この地区が戦争という異常事態と、その後の高度成長の過程の中で各地に現れた大きな流れのなかの淀みのような場として典型的な経過を辿ったことがわかりました。そしてその顛末をジッと見つづけ、そのツケを黙って引き受けてきた象徴的な姿として通船川の今があるんだなという強い印象を受けたことを忘れることが出来ません。

川と同じように黙って環境の変化を受けとめるものに子供たちがいることがいることも感じたことの一つでした。茶色の川のほとりにたつ真っ黒に煤汚れた校舎の中で喘息に苦しみながら、彼らはただ明るく過ごしていたのでしょう。

気負いや正義感とは少し違うと思いますが、その頃、この川を何とかしたい、そして子供たちが自然の奥深さから沢山の知恵と恵みを享受できる、そんな彼らの故郷にしてやりたいと思ったことを今も同じ気持ちで思い出します。

浅井 敬一

水辺の自然情報 INFORMATION2

チョウトンボ

これがトンボかと思うほどの変わり者である。不均翅亜目に属するが、後翅が異常に大きく、バランスがとれていない。従って、飛び方もぎこちなく、蝶と間違われるのもやむを得ない。

ニセアカシアの梢に数10頭が群れ飛ぶ光景を見ていると、時間のたつのを忘れそうになる。翅の模様はさまざまで異変が大きいが、写真のものは前・後翅とも先端に透明部をもつ。

石月 升

通船川の植物ウォッチング

1995年6月25日に、石沢進先生（新潟大学理学部）の指導により通船川の植物の観察会が行われた。3班に分れて植物の観察が行った結果、通船川には以外に多くの種類の植物が生育していることがわかった。

しかし、通船川の岸辺には工場や家が立ち並び植物の茂っている所は少ない。また、護岸が垂直に切り立っているため水辺の水生・湿生植物がはえる余地はほとんどない。それでも、わずかな湿地にマコモ、ドクゼリ、シロネなどの水生・湿生植物が生育しているのが見られ、植物のたくましさを感じさせた。

一方、観察された植物のなかには帰化植物がひじょうに多かった。ヒロハウシノケグサ、イヌムギ、カモガヤ、ナギナタガヤなどの帰化植物がよく繁茂している。これらの帰化植物は空き地や道ばたなど人間の手が加わったところにまっ先に侵入する植物であり、通船川をとりまく環境が人工的なものであることを示している。もっと、自然な水辺の環境が欲しいと思う。

笹原 治

コチドリ

私が鳥の観察を始めて最初に教えてもらったのがこのコチドリである。

砂利の河原で春夏に見られ、水際でくちばしで昆虫をほじくって食べている。

春先の雪解け水で洗い流された砂利にくぼみを掘ってそれを巣にする。

成鳥だけではなく、卵も雛も石そのもので、熟練した人でも発見するのは困難である。

イカルチドリに容姿や習性が良く似ているが、コチドリは目の周りが黄色に縁どられている。ピィーッと鳴く声はイカルチドリの方がはるかに野太い。大きさはイカルチドリに比べると少し小さい。

最近は河原に車で乗り入れる人も多い。ひょっとすると知らぬ間に踏みつぶしてしまっているかも知れない。

砂利地で繁殖しようとするコチドリの夫婦　写真　高橋正良

春先から夏にかけての産卵から雛が成鳥になるまでの間は細心の注意を払って河原に行くほうが良いだろう。

杉山 泰彦

追悼　石崎 正和さんを偲んで

石崎 正和氏を偲ぶ

石崎 正和氏がこの6月29日に44才の若さで逝去してから早二ヶ月が経とうとしている。彼と私の出会いはいつだったか明確には覚えていないが、私が小出博先生を訪ね東京農業大学に足しげく通っていた頃であり、彼はまだ童顔の学生であった。かれこれ24年以上前のことになる。

彼は1975年から日本河川開発調査会の事務局を担当してきたが、実はその前任者が私であり、1974年に私が新潟大学に赴任した後を彼が引き継いでくれたものであった。河川開発調査会の活動を発展させるため彼はまさに粉骨砕身の努力を重ね命を縮めてしまったわけであるが、その貧乏籤を引かせた張本人は私ということになる。

彼の業績を一口で言うならば、「川の復権についての理論づくりとその実現」と「川をめぐる市民・行政・研究者の取りまとめ役」にあったといえる。

実際、彼は新潟の水辺を考える会の活動にも積極的に参画してくれた。1989年のC.W.ニコルが登場した第3回の水辺の会シンポジウムでは、一参加者として新潟まで駆け付けてくれ、地方におけるささやかなシンポジウムの試みを絶賛し、勇気づけてくれた。

彼はとても落語がうまかったが、音痴であり、利根川研修旅行の夜の部では私と音痴ぶりを競ったものである。彼の持ち歌は自作のチョンチョリンの歌というもので、今でも私の頭の中にはその節回しが駆け巡っている。

彼をなくしたことで私は家族の死と同様な空虚感に襲われている。それは彼がいつも、私の無謀な言動を客観的に評価し、かつ最もよく理解してくれていたからである。

戒名は正観清微居士。冥福を祈る。

大熊　孝

数回の電話でやっと連絡がとれ、新潟駅の到着時間を決める。近くの店でコーヒーを飲みながら、てみじかに打ち合わせをすませる。「じゃ、よろしく」と新幹線に飛び乗る。

こんな調子で2年間、伝統河川工法調査の仕事をやってきた。最終年度の仕事の打ち合わせをと受話器に手を掛けたとき、上京中の大熊先生から電話が入った。「石崎が亡くなったんだよ」信じろというほうが無理な話だが、冷厳たる事実だった。

「川と人間の関わりをもっと深く探ってゆこう」たまにゆっくり話し合える時の共通のテーマだった。とにかく、忙しさを絵に描いたような男だった。

「天の川の水防工法について」などというレポートが郵送されてくるのではないかという気がしてならない。痛恨の思いや切

世話人　石月 升

先生とは先日の欧州ビオトープ視察ツアーでご一緒させて頂き、行の飛行機では隣同士でした。出発の直前までお仕事をされていたという先生は、徹夜明けにもかかわらず、お忙しそうな日常についてカンパリソーダを片手に楽しそうに話して下さいました。旅慣れておられた先生のこと、いまでもグラスを片手に世界の何処かを飛び回っていらっしゃるような気がします。永遠の旅に旅立たれた先生に心よりご冥福をお祈り申し上げます。

グリーンシグマ　佐藤 祥子

石崎さんと初めてお会いしたのは、1989年8月、日本河川開発調査会が企画した第14回海外河川研修旅行『近自然河川工法とライン川の旅』でした。スイスへ着くなり、半数の人の荷物が届かなかったり（カナダへ行っていた）、数々のアクシデントもありましたが、ライン川沿い諸国の様々な水辺整備を見ることができて、非常に有意義な旅でした。その中でどんなことがあっても、ニコニコとして動じない、石崎さんの姿は今も脳裏に焼き付いています。それ以後、新潟でのシンポジウムに駆けつけてくれたり、グリーンシグマの業務への技術的協力をしていただいたりしていたので突然の訃報を聞き、これからの新潟の水辺づくりにとっても、大きな財産を失った感があります。ご冥福をお祈りします。

世話人　森本 利

今春まで私の修士論文のテーマであった伝統的河川工法について、貴重な助言を頂き故人にはたいへんお世話になりました。修士終了に際して、お礼の電話をした時に石崎さんから“新潟県に就職だからまたどこかであえるね”と話してくれたことが最後の言葉でした。余りに急でまだ半分信じられませんが、故人を偲んでここに哀悼の意を表します。

六日町土木事務所　林 和彦

突然の訃報で大変な驚きと悲しみにくれています。石崎さんとのお付き合いは、昭和51年の第1回海外河川研修旅行からでした。その後仕事上でアドバイスをたくさん受けました。ご冥福をお祈りします。

阿賀野川工事事務所　福井 義隆

私が石崎さんのあとをついて歩くなるようになってから約2年。川の調査を始めとし、自然復元研究会や中国研修旅行等へ参加する機会、そして様々な人との出会いを私に与えてくれました。

どこへ行っても石崎さんの周りには、常に人々が集まり、その人柄と人望の厚さを感じたものです。

仕事の上ではとても厳しい人でしたが、時々違う顔も見せてくれ、私にとっては師匠であり、叱ってくれる唯一の人であり、良き理解者でした。

平成5年の春、長野・新潟の水辺の会での犀川、千曲川歩きが印象的だったらしく、「あの時の犀川はよかったね、また行こうか」と話したことを覚えています。

石崎さんが与えてくれたことをいつまでも大切に心に残して頑張っていこうと思います。

関東学院大学大学院　菊地 静香

水大人・石崎 正和氏を偲んで

彼は大熊さんと対等に川を論じていた。と少なくとも私にはそう見えた。

1989年ヨーロッパの近自然河川工法の調査団は8月ライン川を縫うようにバスや船や列車をつかって上流のスイスから中流のドイツ、フランス、河口のオランダと旅した。この旅を企画し、全国から学者、研究者、技術者、行政担当、市民約20名を集めコーディネートしたのが他ならぬ石崎さんだった。少し太りぎみで貫禄が有り頼りがいの有る幹事だった。

数十ヶ国の河川を見てきた余裕が感じら れた。その為か往復の機内ではイビキをよくかき、ひたすら寝ていたように覚えている。

その後何度か水辺の会合で合った。私を見つけると必ずニコッと微笑み、「やあシバラク！」というのが印象的だった。私に「どうっ、今度マレー半島の川を見にゆかない？」と誘われて一緒に行けなかったのがいま思えば残念。彼は何となくアジアの似合う『水大人』だった。いや酒大人だったのかな！？合掌！！！

世話人　相楽 治

会員紹介 MEMBER'S

西村　一孝

[redacted]

新潟市民になって3年。山口県出身の人間が縁があって、この会の仲間に入れていただきました。私自信今年が、本厄にあたっているので、新潟の水辺をきれいにして、厄を流（落）したいと思っています。くれぐれも巻き込まれないように気を付けて下さい。

田中　カツイ

[redacted]

川といえば、幼い頃に自分の家の前に流れていた川。いつも、その風景を思い出すと、心にやさしさが戻ってきます。日々、何か楽しいことはないかとキョロキョロの目、ドキドキ・ハラハラの行動ですごしている。なんでもやです。

川瀬　詠子

[redacted]

上越育ちで、関川の支流の水を飲んで暮らしていました。1年半前までの4年間、信濃川支流の最上流の水や、天竜川水系のおいしい水を飲んでいました。それが今や、信濃川下流市民。夏は特に無理ですが、おいしい水が飲みたいなと、思っています。

金木　誠

[redacted]

本会の設立趣旨と活動内容に賛同し、この4月に入会。阿賀野川は、日本有数の大河であり、その沿川には、地建管内の最大都市圏や風光明媚な場所を多数蠢している。また、当河川は、治水・利水上の重要性に加えて、河川空間・景観の有するポテンシャルには極めて大きなものがあり、その利活用を積極的に推進したいと検討中。

西本 晴男

[redacted]

本年4月より新潟市内に勤務。信濃川の河川事業と新潟海岸の保全事業を担当する事務所です。兵庫県の西端の田舎町の出身。建設省に入省後、長野県（2回）、北海道、東京、山梨、富山県に勤務。各地で様々な文化、人、自然にふれることができました。

会員紹介原稿募集

写真
or
似顔絵

氏　名

郵便番号
住所
連絡先
電話番号
Fax

新しい会員の方から順にご紹介していきます。写真や似顔絵とご連絡先をお願します。
※前号でご紹介した西本 晴男様のお名前が間違っておりました。大変ご迷惑をおかけしました。個人を大事にする会として、改めてご紹介いたします。

高橋 正良

EVENT & BOOKS

イベント情報

1 '95信濃川フェスティバル

日　時●1995年8月19日(土)～8月20日(日)
場　所●新潟市　信濃川やすらぎ堤
内　容●音楽隊市中ﾊﾟﾚｰﾄﾞ、燈籠流し、万代太鼓、屋形船他
主催：建設省信濃川下流工事事務所他（025-266-7131）

2 通船川セミナー　～これからの河川を語ろう～

日　時●1995年8月20日(日)　午前10時～午後1時
場所／申込先●東地区公民館（025-241-4119）
内　容●講演「これからの河川を語ろう」ﾜｰｸｼｮｯﾌﾟ／講師 大熊 孝 教授／定員 50人／参加費300円（資料代、軽い昼食付）

3 E（交流）ボート大会inシャクナゲ湖

日　時●1995年8月26日(土)
場　所●シャクナゲ湖（三国川ダム湖）
内　容●Eボート（10人乗り）を使った競技と交流
主催：信濃川ファンクラブ・新潟の水辺を考える会他（025-263-2733）

4 富山市都市河川見学

日　時●1995年9月10日(日)午前8:00　グリーンシグマ集合
場　所●富山市内（日帰り）
内　容●富山市のいたち川など見学
主催：新潟の水辺を考える会（025-263-2733）

5 シベリアネイチャリングツアー'95

日　時●1995年9月11日(月)～9月18日(火)
場　所●シベリア（ロシア）
内　容●ﾊﾊﾞﾛﾌｶ着ーﾁｭｹﾝ川を下りながら各種のﾈｲﾁｬﾘﾝｸﾞﾌﾟﾛｸﾞﾗﾑ、ｵﾚﾉﾋﾞﾝ川を下りながら各種のﾈｲﾁｬﾘﾝｸﾞﾌﾟﾛｸﾞﾗﾑ　主催：ネイチャーワーク（025-270-2010）

6 第6回世界湖沼会議霞ヶ浦'95

日　時●1995年10月23日(月)～10月27日(金)　午前10:00～
場　所●筑波大学会館・土浦市民会館
内　容●記念講演・基調講演・分科会・霞ヶ浦ｾｯｼｮﾝ
主催：世界湖沼会議実行委員会（0292-24-6905）

7 水辺シンポジウム『通船川の夢を語る』（仮称）

日　時●1995年11月18日(土)　午後1:00～
場　所●新潟市万代市民会館
内　容●通船川についての報告会　ﾊﾟﾈﾙﾃﾞｨｽｶｯｼｮﾝ『通船川にかける夢』
主催：新潟市東地区公民館、新潟の水辺を考える会他

新潟市景観形成市民団体連絡協議会に入会

新潟らしい都市景観を市民自らがつくり出してゆくため、市内の10以上のまちづくり団体・グループをネットワークした新潟市景観形成市民団体連絡協議会が結成されました。

私たちの会もその一員として他のグループと一緒に水都新潟らしい水辺を活かしたまちづくりを考えていければと思います。

当面この連絡協議会（略称考えて!!）は来年2月に開港5都市（函館、新潟、横浜、神戸、長崎）のシンポジウムを開くことになりました。

全国各地から訪れる人々と"水や港"をテーマにしたまちづくりと、併せて開かれる新潟食の陣での食の議論を交わすことになりそうです。　杉山 泰彦

書籍情報

1 「日本の水害」

著　者●小出 博（編著）
出版社●東洋経済新報社（絶版）
内　容●今から40年以上前、日本各地を水害が襲ったことがあった。昭和29年9月、この水害の研究をまとめた小出 博 氏（編著）が「日本の水害」を出版された。治水工学の目的は過去の水害の科学的調査や分析だけでなく、自然と調和しながら治水を行ってきた伝統的な河川工法を現代に生かすものでなければならず、その有効な対策として水害防備林があると提唱された。水辺の会会長の大熊 孝 教授は、自分は今も小出 博 氏の説から一歩もでていない、といわれている。この埋もれた名著を発掘するのは新潟の水辺を考える会の事業として取り組むべき作業と考え紹介します。　高橋 正良

新潟の水辺99選 早出川 衣岩の瀬・淵・崖・川原

この約1km上流に早出川ダムがあり、その放水によって時々濁った水となり、水質の悪化はいなめないが、自然な川の典型的な要素である瀬・淵崖・川原をそなえている。

このすぐ下流右岸に土方 幹夫 先生が主宰する本格的ログハウス・ジッピがある。正しいアウトドアスポーツ（？）のメッカとなりつつあり、早出川でカヌーを楽しむこともできる。

大熊 孝

編集後記

●どうしても石崎 正和さんの追悼にページを割きたいと編集サイドから皆さんに協力をお願いしました。この他にもご縁のある方がいらしたかもしれません。次号でご紹介しますのでご一報ください。

私自身は菊池さん、石月さん、森本さんと一緒に千曲川を楽しく歩かせていただいた思い出が一番印象的です。福島さんからご紹介いただき、個人的にも日本河川開発調査会の会員としていろいろとアドバイズいただいておりました。ご冥福をお祈りします。

●新潟の水辺99選コーナーを新設しました。11月18日開催予定の新潟水辺の会8周年記念大会で発表しますので原稿をお送り下さい。

●昨年8月ドイツのバイエルン州の最高建設局の方々に自然に配慮した工事を行った現場をいくつかご案内をいただいた。アウトバーン（高速道路）建設に伴う「アラッハの森の調整措置」はその一つで、州政府の記者発表パンフレットを新潟大学の丸井英明助教授に監訳していただいた。印刷実費くらいはいただくことにはなりますが、まもなく日本語版をお届けできる予定です。

編集鳥（へんしゅうちょう）高橋 正良